

特45

108

神

た
ま
し
い

本



正
々
堂

№ 23220/

22



六十一

「こゝろあらばむくらの宿も玉の閨。たかひもひくひも戀ゆへよ。へたてぬ中となりふりも。露よいためる秋の蝶。はうでも四ツの二人づれ。」余所目よりれとこのもしく。うらやむ風の福がたよ。名さへかくれぬ廣井とて。うの兩替の金ことも。忍びかねてやいたづらよ。姫のおもひの千早振。まんを結ぶの髪結と。ツイすけ成なれりめて。二世と誠の爲替を。うししかやけて胸の火の。きゆる思ひも水油。さしてひく手のみち筋立も。「髪の松原つとの山階尻こしてこゝぞ名よ。たかくも月の出舞たいよ。たどりくして來りける。」みわたせり。はるか空よすみのぼる。月のかつらのかげふけて。思へはほんよりのはじめ「ふつとあまへを透櫛よいふよいはれぬもつれかみ。」今さらおもへばうのさきよ。可憐と深く。かわて。すてすかれていてうわけの。はあれぬ縁よし元結しめた。中もさふからまらわけさればさふでわたしの仮結。とはあきらめて居さからも。「明くれ忘れ兼升よ。せめてこゝろの一步銀。といて一朱といわれたさよ。思ひは百兩千兩箱。ねがいかなふたうれしよよ。ほ恩もあまる大判の。アノたらちねをふり手形。ふるさとすて。出し身の。つみさへおもき分銅か。地ごく

とやらで天秤よ。かゝることかとうろしく。すがりあげ、ばさすかよも。「おとこは胸もいたかねよ。せまるこゝろもどりあふし。姫が春なかを撫擦り。「うのあげきはなる事なれど。不孝のもとの聲箱も。皆あわれからあてること。」今さらはなれぬ身のさびは。切よきられぬ剃刀ど。あきらめておしたまひらば。「たかひよこゝろ洗ひかみ。さへけた中もむつまじく。うふてたのしくくらさんと。思ひおもふてきたものを。さふか今でり不渡りのやうありなたのこぼはつき。あなごの心の相場帳。いかよくるひがあるとても。今さら違ふ算盤と。ひんどばかりのすね言葉。いわれて煙とをりすがり。「エ、さへ入ません助成さん。めんじるよりのひと言葉。もしやあ氣よさわるあら。どうぞゆるして下さんせ。中よう添て行すへよ。あまへよよう似た小玉をば。うみ落したさよこ。送も。ようへもらさぬ草財布。心でしめているわぬあ。」涙よこをさるみつ。すがりあげいて袖袂。ねばりくしてびん附の。はあれがたなく見へよけり「いと長き秋の夜も。明がたちかくなりけれ。いつきまでこゝよあるべきや。よしあき人目よか、りてり。言葉の飽や銀だしの。貝なき浮名立ぬさき。「いと來たまへと手よ手をとり。しごきをこめてうち連だち。解櫛のむねや砥石の原。けぬきはさみの宿

をこへ。東ししらみよひん國の山子の里より三重つきよけり」
 倍又茲よひんがた大軍師工面將監成安のかねて助成と示し合せ其謀計圖をはすさず彼の助
 成と徒姫の今朝しも此處よ來りけれの喜悅の面色しめたりと疾より用意をしおきけん近き
 邊りよ造作も風流めかせし家を借りけ爰よ二人を住居させ居村の庄官を欺て夜具万端もか
 りものなれと調度のためひよ不自由なく同じ穴ある古狐奸智よ長し雇れ嬪婦を下女よ仕立
 てかしづかせ餅よ關子ともてなしし姫が心をなぐさめけれれた、深慮よ育かひれて人どあ
 りたる徒姫か、る邊鄙の氣易さの物毎よ愛らしくうの上好た色夫と身儘よくらすことなれ
 い意の樂しさ限なく館よかへることなどの露ばかりなく居るうちに伴の文の屈きしや翌日
 可寄の此家よ來り兼て約せしことなれい附添きたる供人を唯よきはとよ云こしらへ先よ飯
 して跡よのこりたがいよ笑坪よ入りちも尙又將監上風を回らし可寄ようつとさ、やきて御
 身一回館よかへり倍兩親よの斯く一門よの云云と言とたくみよ説論せの可寄のこころへ
 其翌日館よかへりて胸吉はじめ廣井の一門りれくよ彼成安が言のごとく唯何ごとも姫よ
 こかせ誠しやかよ云けるの兎角よ姫君助成と夫婦よあらでい如何なるとも此儘て再び館よ

かへるまじと自もかへし玉わぬよし他事なく是をつたへけるよ胸吉夫婦の驚感なし夫ほど
 好た男さらり此方よ引いれ養子となし添しもすれと稗のりの性氏實方よあるなれば縁組を
 どを致せしこと我君持金銀よ聞へない國家の亡ぶのみあらす富門末代の耻辱なれば縁組致
 す譯あらず去ればと聞て斯迄よ思ひつめたる事あれば思ひ切らす術もなし唯此上の何事
 も世上よ浮名の立ぬよう姫がこころよ任すより外よせんすへ有まじとて可寄の彼所よ附隨
 ふて姫よ過ちなきようよ尙また望の品もあらば何され筋よ言越せば直さまかくり遣すべし
 と彼將監か遠謀よ寸分違わす爰よ爾る、親心可寄を再び彼首よつかわし資者の手金よ附と
 い更よこころも附さりける是よりして將監の金銀米穀の言も更なり衣類手道具家作りまで
 左も格外よ習した、ゆ回々廣井よ言つかわせと少しも疑ふ心なく望のごとく大金を山子の
 里へ仕贈を折々家臣の是を止め諫言する者ありといへど爰よ爾る、兩親なれば如何を用ひ
 る氣色さく折角所在の知れしよより充分安堵したるものを今又彼れの申越しを彼是として
 拒みもし氣無苦勞よ日を送らせ若し煩もする事あらん天よも地よも替り得がたき大事の大
 事の一人女を玉なしよする甚ひされい金銀を以て事のたる極き事と彼是と拒む事なと成か

たしと諫言更は容れさりしと去れり又此事を自づと世上は傳りて今の既は福方の大軍師
口入仕間守金為は驕へけれの金為驚嘆一方ならず密に智計を回らして後の防ぎぞあしける
とせん

第八回

處女悔し非歸生家

却説は首は福軍の烈國可撥州寄の城主由指衣紋之介姿好の其身宮門は生れながら常は足こ
どを知らず榮花の隈り仕盡さんと家は在る日ハ福有よしして品水評山は黄金をちらし晝夜酒
色は沈溺し家事公勤を忘却し妾宅別荘は華美を結し終日遊戯は心を寄せ春の日照も短か
しと常娥を會へる肉屏風秋の夜とても長しとせず美食美服は倦果て得かたき漢土の器物を
集ますく増長するよしだがい是は是は諂ふ佞人よの辨問防辨輕利取右衛門山居養千香など
何れも側を去らすして精補は足入とどくひつ附さかして居るほどなれの上乱れて下治ま
らず是と見習ふ家の長臣藤守成右衛門有金のじめ始末仙治郎實無養養五郎時無杯思ひく
の我儘きめ國難紊乱家門衰頽の姿とあり去れと姿好公初め臣下の者も是れを挽回するの

心なく涙莫よやるだけやつつけろといふ勢よて追々月日を重るうち次第くは貧困は陥り
今の致し方なき事よ來たれハ一族へ對し申されるハ吾今福者は産ながら斯る貧苦は迫り既
よ今日よ差迫りたり然れとも未だ貧國の味方せざるハ是れ義を重んじ忠を忘れぬが故なり
去るよ因て此程余りの困窮よより不得止聊の無心を言入しハ氣野長登守春豊の文聽め聽届
もせず剩さへ我よ對して不忠など、いらざる耻辱を與へたる件奇怪至極の雜言をり係れハ
我今何を樂しみ何をか待て此究をいつ迄堪へしハのばんや斯ある上ハ速かハ彼貧國ハ味方し
て怨み重る福方を只一戦よりち倒し氣樂ハ貧乏とせんとおもふ方々いか、あるべきやと問
違ひだらけの無理屈を尤もらしき顔つきよて破れた、みをうちた、き聲を震ふて申けれハ
其座は居あハす無分別者各くハ天邊壁を揃へ夫れハ何と奇妙の奇策前ハ福者の生れでも此
して今を見る時ハ开も福軍の雜兵よも遙か劣し暮しあり夫よりも疾く貧方の味かた難行ハ
我々こり天晴一國一城の幟大將ともあるべきおれば必ず猶豫すべきよあらずと同氣求むる
有項天すでは評定一決しけれハ姿好ふた、び申けるハ某つくくハ惟よハ如何ハ氣易き貧方
よても素と是我等の福方よて其名を知れし福將なるよ今更貧者よ降らんと借錢城よ至ると

も必ず福者の計略ならんと却て吾らを疑ふなるへし是を以て考ふれり先其味方又ゆかさる
 前よ今我手勢を引具して程遠からぬ麻松の城に押寄せ大將たる氣野長登守春豊を只一戰に
 うち亡し是を手初の功として味方又行の術さらし重く用ゆるの必定なりと辨ましかして云
 けれり一同これ同意して夫より専ら用意をするよ儘の表を引めぐり露を作るものあれり
 紙屑かごを甲と名し或のいかきを紙よて張むかしの劔よ今のなた研すますやら其ほか又火
 吹竹よ茶代をさし刀の思ひよ帶すれば破た布の風呂しきを繰のかわり又する者ありて旗挿
 物の竿竹よさまゝなる物括りつけ宛ら孤よ化されしか又の二〇かの行烈か其状景の馬鹿
 やしき實よ言語よ堪へがたく既よ用意も綱ひければ近きよ夜討せんものと勇み立てぞ待居
 たり爰よ福方の一大將氣野長登守春豊の此頃本城よ在て不斷悠長の質なれり朝食を初むれ
 の登過よ喰むり糞飯の夜の初更よ箸を納め夕食の仕まいり翌朝よ至る又湯よいれり二日
 もあがらずたまゝ氣かるか其時の我庭先を見先行よも亭座席よて三夜も泊り米一粒づ、
 穀をして飯をたかせ餅の燈明の灯よてあぶる山か轉ても容易よは其坐を動かぬ悠然丈夫今
 宵の露院よ家臣とあつゆ三百年ほどまへかたの算用ちがいを綱べんと各々古儀ならべたて

氣長き勘定する折しもおもひがけなくあわたしく注進とて走せ來るよコハ何事と疾く
 見れり下候取高三田平よて頭を庭よ摺附て敵の正しく何者か其姓名の分されども察する所
 妾好が歡樂よ耽けし借錢の仕法よ苦しみ無心せしも願望成就せざりより意趣晴よし來り
 しあらんと聞より此方の氣長大將も今の其身の一大事いで物見せて呉んづと俄よ一門へ下
 知を傳へ防禦の用意よかりしかの立所よ人馬集り其數凡ッ六百騎吾も一と打連立响
 喊してぞ係りけれり威好勢の元よりも人情不測の無忠臣如何んぞ身命あけずて、進軍すべ
 きものあらず放々の休よ逃ゆくと長登守の怒り立逃る敵をバ追かけて吾城空しくなしけれ
 り新貧衣紋の妾好の味方の兵を屬よして進軍すべき命を下すも一人として應ずるものなく
 皆散々よ逃行たれり今よ是迄と覺悟して其身も驢を回して逃出さんとする折しも麻松城よ
 人聲の最と喧しく聞ゆるよぞ右是を看かへれり何國よりか一群の貧軍一時よあし寄て寝松
 の空城をつけいり何なく之れを攻め落せり是ぞ工面將監成安の一手の軍勢たげけるか豫て
 衣紋妾好の事を舉るを探知して時機を謀りし工面よして此迄既よ莫大の廣井の財寶食りた
 れば是を軍備よ充たりとぞ去れり妾好も此手よ加はり貧軍の餘影よ與んと是れが手續爲し

たるも狡猾究まる將監なれいつまはじきして受付ねば茲に姦好先きの無分別后論し又屬軍
 又降参し其一軍師と擧げられて一層勉強家名の再興元の金持長者は復飯すること肝要と彌
 よ務め勵みたりと話替りて徒嬢の遅々月日を送るうち彼の助成の持前の浮氣の性も長持な
 し早晚外よかこひめを置いて茲へと入こみて煙と可宵又寄りつかぬの二人ともく後悔を
 し輕採しく男よ掛り恩も大なる變親も痛く心を煩いしめ其上金銀財室を欺きとられし事共
 を今更おもへ傷のしく可宵と共に打撃き更一念豁然し或日本家へ歸飯り元の深念も起
 居する身どのなれども既其身を汚したれば一層後悔をまたりたり

●眞の話し心も解て

長唄勸進帳

「實よく是も心得たり人のあさけの盃を...」
 「請て飲込む爛ざまし

●ツイした事から浮名が洩て

はうた 「桐の雨かゝりて袖濡つばめアレ見やしやんせ鳥でさへ馴しとところを振
 せて...」 「つれなき前此の苦勞

●論より證據だ是マア御覽羽織と衣服に侵染としは
 ●主と二人でいま此の苦勞寢物がたりのこともある

第九回

下宿主人責三懈怠
 三生不覺起奇過

男兒立志出郷關學若無成死不還ト威張て見たもの、故郷より仕送りの
 學資不足なりとて故郷の空うらめしく休道他郷多辛苦同胞有友自相親ト
 吟じながらも下宿屋の飯の菜不足ありとて増加論を主張「ブツツ」を典じて商品一夜の
 快樂ともどめ衣類と沽却しても北廓小夢を結ばん事と欲す口と心裏腹もて理論と實際
 は併行し難一人生僅か五十年光陰の吾れをまた本年の本月本日豈再び來る事あらんや
 トのなんどの附會してとうく男兒失志歸故郷トいふ段落も陥る書生は状態困
 つたものなるのち此又神田邊の下宿屋友ともつて集るとの意のらどりたる類集軒といふ
 旅亭あり一夜泊りの御客ハ多斷り興の二階ハ十五疊を三間ハ仕切り甲乙丙の番号分ち
 たる四疊半ハ天下の書生の寄合部屋甲の室ハ法律學の通學生法尾眞奈平乙の室ハ醫學
 生の甘井了簡丙の室はぬらくら書生の塚見金玉いづれも同宿の戀意をうし寄るとさわれ
 ば互に惚れらた話ばかり中も甘井了簡ハ自ら号して根津の粹蕩夫廿「チイ何といつ

ても根津だよ前宵なんぞの彼の的が非常の奮發サ「コウ聞玉へ僕が試験一件で三四日看願しねへどまろのらの曰くサおまたの新八幡へ入らーやツたさうでそがさッ御愉快でしたらう憎らしいトの一聲と共に僕の腕をぶつとりと來た紫色といふ一件だがナント忍耐も何も出來たものじやアあるめへ法「イヤくどうりでよそ君の顔色形容枯稿と來て居る塚車大見て而て之を問て曰くサ子の甘井了簡にあらずや何故又今歸りたもふか法「甘井が曰くサ客を擧て皆もてたり吾獨りふられぬ衆客皆樂めり吾獨り苦めり此を以て早く歸るが聞て呆れらア甘「コウくそねめく兎角好男子のうるせへヨうるせへと言バ今朝友人の所へ廻りやした塚ナせうるせへと言バ友人の所へ廻るだろウ甘「ナンれまた交ッ返さうと思つて燕雀なんぞ大鵬の志しを知らん此の一回何等のよとを言出るや其の次の分解を聞けサ法「此やつ何事をの言ふかト首をのたふけ手をこまぬさ左右の耳をこまして聞た所が尻の如き説だろ甘「君までが助太刀の情けねへイヤ閑話休題として本文お掛りやせふ僕の友人又司法省へ出て居るのが有りやす其友人又一人の娘ありサ塚「年の十七番茶も羨花といふしろものか「甘マツ聞玉へ其娘の十七才塚「ヤツぱり同案

廿「年の十七容貌の頗る艶よして比す可きものかし法「沈魚浴雁羞花閉月といふ賞牌付だろふ廿「先づろんちものサ所で今度聲をとりたと言ふ原案だが殊も未だ水入らずの處女膜附といふのだから幸よして此の美人の所へ聲にささべ人生れ快樂サ法「モウ聲の人撰の極つたのか廿「所がさまらぬのだ友人の言ふにバ先方ハ僅の三十圓許はつきや月給のどらちいが親父と言ふものが中々の開化人で聲の身元や家筋のさうでもよいが學問のある識見の高い人物の得しいどの注文だから君等の友人中又注文通りの書生があらば周旋をして呉れる殊も娘といふも一通りの學問のあり女の藝といふものもあら形仕込ださうぶから當節の娘で先づ上等だといふやした塚「ツイツ至極面白ナント僕が聲とありていものだ法「イヤく塚見氏の顔色で第一當人が不承知だろウ「塚ナせく法「ナせとツて鼻といつたら大神樂の獅子を見たやうで目ハ奥の方へ引込で居てピカリく光る一口ハメツと向へ出張て波戸場といふ体裁あり恰で便器へ目鼻を付たやうだどらも當人が承知しめへ塚「へん足下の面だツて砂地に夕立のいたやうに面中ボツく穴が有ヒアねへか藥店の聲なら丸藥の乾場よるといふ事も出來るが先が官員だから始末

又困るだらうヤツぱり聲の合格といくめへ法「ナニ程でも黒羽織の五ッ紋は仙台平の袴でも穿バグツト引立せ塚「あんば着物を着替たとて面の皮を着替る譯よりいくめへ甘「ナント首をどげかへるがい、法「ハ、ハ、ハ、それのさうと僕を婿に周旋し玉へ塚「僕の方が先口だ甘「妹背山から婿一人又美人二人といふ狂言だが此の狂言ハ美婦一人ハ醜男二人だから何方へ團扇を上るも僕の裁判よりゆくめへ然る君等ノ惣領の甚六といふ株だろふ養子よりいられる身分でのあるめへ法「君も野暮を言ふせ當節がら真似口で婿よなるやつが有るものか當分の洒浴は婿よなつて毎晩其別品を自由にした上先方から金を出させて學問をさる迄の事ヨ修業が出来一人で飯が喰るやうになりやア跡足で砂をぶツ掛るのだから惣領の二男のといふ論いならねへ僕だつて今である下宿まおおくするもの、一兩年の内もやア差向き法學士の稱を得るのだから事よれば歐洲とモ一週して歸朝の上直ち小年金三千五百圓の判事よになれるだらうさうすりやア其女だつて本妻といいくめへが一等下で權妻よりえてやるせ親父も今三十圓とつて居るト言ふが僕が志を得た日もやア八十圓の御用掛位にやア吃度引上るヨ何なら其の事も先方へ話して置て

呉れ玉へ先の都合次第で今夜も見合をしたものだ塚見氏なづの是といふ將來の目的があいと云ふものだから先でも余り望まぬ口だろふ塚「吾輩だつていつまで下宿も居るものか君の卒業や法學士のあても成つてあらぬ様なものサ君ハ郷里を出て已小四年なりながら試験は毎又落第して今年も立寄きやア私塾の學科も卒業ハ六ッかしいと云事だ此間も君の尊大人が郵便をよまして學資が足りあいくと言ふが責て學業進歩の効でも現いきた上で不足するならよいが東京から四年もなるよいつも同じ級も居るといどうした者だ大奮發して早く卒業して歸ると言てよましたじやアないか其ハ學問の其方のけよして婿よなる存念との驚き入つたものさ法「へん君だつて何の爲に下宿して居るのだコウ少し自分ハ身の上も考一考す可しサつかミ陰袋でぶらくして居て人の胡魔よ付て酒を飲たり官員の宅へしけ込でい臺所でおべつかをやらかし若間がよきやア等外よでも這入込ふと思ふの目的で下宿屋住居とい卑屈極つた話だろふ吾輩さざア日夜法律を研究して居るから君より見識も高し其上百事經驗があると云ふもの君とい雲泥の相違もありやすと口から出鱈目もやり付れの塚見も負ぬ氣吾輩不肖と雖も事業を以て天下よ

事をあさんとするものなり君の如き區々の文學も就て一身を立やうなどと思ふやからと
 の大小異なり僕近日大は出版會社を起し豫約の法を以て一萬人を募集し豫約金一萬圓を
 集め盛大の業をあさんとするものあり豈君は如き月給をわてよする卑屈もれに倣はんや
 ト婿一條より互は居丈高あつて論し己よつかみ掛らん勢ひ甘井も大もて余しマゴ
 くする所へ下宿屋は主人士族わがりは人物寐子半纏を着た分別さかり三人は中へ這入
 りマツノへ静なせいやいせうしたもんで五坐りやす一体何が原で斯んな騒ぎよなり
 ましたナニ婿入は一條ナニ御兩人で互は争ふたが初りてイヤハヤ驚き入た事で五坐りま
 す全体あきた方が了簡が違ひませうあなた方の學問をなされたか方向も蚊も了承知で
 五坐りませうが此節の養生方いどうも氣が定らない様もお見受す一ます甘井さんだつて
 お國許をお立の時いせう云了簡でお出なりました東京へ參つたなら一日も早く卒業
 して國へお歸りになり了親父と共に以醫者をなさるは了簡で五坐りませぬの私方へ了
 出にちつてから最早一年余になりませうが一月の内十日の處勞たくと學校への届書と
 出して根津へ計りお通ひあさる其も若いお内は随分ありがちの事お異見申すのでありま

せぬが當月三ヶ月下宿料もお拂はあらず了所持の本は何所へお預よなつたか一冊も見あ
 たらす其上根津よりの度々勘定の催促よの參る昨日も古着屋が甘井さんお了用立た袴の
 代をトヤて參りました其に慾兵衛からお借入お成つた金子もどうりあさらずに成ませ
 へ个様よ四方八方へ借金をお拵あつてお出あさるよ學業の一向よ了進歩もあいとヤ事
 其等では坐りませう毎晩の女郎買の上お人の婿の世話あどあさる程な氣樂なお心るれ
 での親了へ濟ますまへ法尾さんだ迎其通り人よお逢さへなされは法學士くと言なさる
 が其もよくない事で了坐りませと殊お人の娘を瑕ものおまよと云了簡あきたの若い年
 でお出なさるから其でもよふ了坐りませうが婿を貰た當人が可愛さうで了坐ります其
 わあたい楊弓屋這入りをよくなさるのがよく有りません少一精出して了勉強あされ早く
 國へお歸りお爲て了兩親に安心させるが何よりの孝行あんな事ひ百も承知だとおつーや
 りませうが何は了承知してお出なされても實地へ行ぬ學問の却て知らぬよも劣りませ
 う塚見さんも塚見さんでの了坐りませんか婿おなりたがつてお騒ななさる位あらず少一了
 辛抱あさつて人並よ下宿料もお拂よなり其上何なり了一身の餉口を立る策をお考あ

るがよう五坐りませす事業をするくと富士の山へ登て近江の湖水で足を洗ふとやら言ふやうな大層な事許り吹聴してお出でなさりながら一圓や五十錢の錢も困てお出でなさるで有りませぬり巡査や教員の不才子のする事だ杯と許りおつてまやしても巡査何どの稼ぎも出来ないとの情ない事でのありませぬかナニモ頼まれもせぬ私がお三方へ御異見を申すでの有りませぬが常々余り御心掛がよろくないかトお見受申しまえたる故ついで一寸申上て置ます少一お考へなさるがよう五坐りませうとならべ立たる理の當然又冗口はいくらでも叩く連中あれど一句も出得ず黙つて居れば亭主の其儘下へゆく跡よて三人顔見合せ互に舌をペロリ

第十回
志士輕進不願後
天保志士誠三壯士一

先生御存宅で御坐りませすか麓野近道で御坐いますと云ふ聲聞て今迄坐敷の椽又飼鳥も水をやつて居たる老人眼鏡を外せして立出ながらを麓野氏かやれく久しぶりよく尋て御坐つた先づ此方へ上らつしやるがよいといつお替らぬ老人が氣輕さは近道の座敷へ

通つて先づ一別以來の口誼をのべ久しく拜顔を得ず候ひしが相も替らぬ御壯健又居させられ大慶至極も存し奉ると言ひつゝ携へたる土産物など差出せのイヤく様様の心配の無用もさつしやるがよいトキニ足下久しく上京もせなんだが矢張國許も居られたであらふ國の便りも久しく聞ぬが近ごろ珍らしい話でも御座らぬかな足下今何をして居らるゝと師弟の間柄とて何かと心配して問ふある可し近道は膝を進めされのよて候國表の近況も是と申と程の御話も御座りませぬが御承知の如く近頃は政黨の勢ひさかんよしと或は自由黨又の改進黨とて縣下ふ己よ二三の黨派之れあり中よも自由黨の勢力の余程さかんよて黨員も二千余名も集り申候私さずも自由黨の幹事お撰擧致され此たび東京の自由黨へ黨務の儀も付罷り登り候が東京のまた東京だけ中々識見のある黨員もある様子末頼母しく存じませよと答ふると聞くと等しく老人の「ヲ、其の一段の事然し自由黨とやらに國許で誰々おどが周旋致しをるや定めて社長もあるであらふ近さん候ふ自由黨の社長は川上淺五郎先生よて幹事の田所泥之進山際巡入と私三各よて候改進黨の黨長の池中潔先生よて樋口長一郎溜田水藏等の人々にて御座候老イヤ川上も年甲斐もな

くまだ騒で居るか止べい、事又近「先生の御説とも存じませぬ年甲斐もなし」といひか
 る儀、御座候や西洋諸國は於ていづきも白髪を戴きたる人々ならでの政治社會も信用
 なしと申事なる、只今の御説の何分了解仕り兼候老ハ、ハ、ハ、イヤ何も年とど
 つた者がする事でない、ト申でない、今の自由黨やら改進黨やら言ふ有志者がいかよ
 無氣力で何事もなし得ぬとあるを笑ふのじや斯く言ひ、政黨のする事を笑ふ様もあ
 れ、議論すると思はれて、ならぬ程、政黨の悪口、口まづやめとして、足下輩の事に付て一
 文句付てやろふ、一休足下等初め若い手やいが自由の民權のと騒ぎ立る、何の爲よさッし
 やるのぢや今の世の中、不自由ちや參政の權があくて、不自由でならぬト言ふ事、有ふ
 足下輩は參政の權や發論の權ぞがあいとて不自由と唱ふれど、此の不自由より一層不自
 由の事があるではないか、國の自由黨初め日々活計、困つて居ながら國の爲だ世の爲だト
 騒ぎ立るとは一向氣の知れぬ事である、足下なども一ヶ月も少くも十五や二十の金がな
 くて、丁度に飯の喰へぬ、箸其鼻の下の建立、おの心配もせぬ、國會の建設も許り苦しんで
 居るとは氣の知れぬ話といふものぢや、衣食足りて禮節を知ると言ふ事もある、何でも衣食

の事が丁度よゆかなくて、事の成るものでない、今の若い連中の、個様な所へ、一向、頼
 着のせいで、白い木綿の帯と太い杖かわれば、喰せ、飲せず、事の成る様、許り考ふる、飛んだ
 事と言ふものぢや、ト苦々しくやり付れば、近「ある、何と先生の仰せらるゝ通りかも知れま
 せぬが、先生も亦た維新前に、飲せ、喰せ、奔走なされたでは、御座りませぬか、其れでも、天下
 の有志家と稱しどう、王政維新とあされ、今の賞典祿の公債證書で、斯く安樂おかいでな
 さるで、御座りませう、今日の書生の一身の榮枯得失を、願せ、盡力致すも、やはり同じ事で、御
 坐りませぬか、ト存じます、一本、刎ね付れば、老人更も、携せ、「イヤ、維新前の有志家
 が、奔走した時と、今日と、大違ひ二十年以前は、一文あしで、日本國中を、飛んで、歩いて、一
 向に、差支ない、金、澤山、持て居ては、却て、人、輕蔑される様、もので、木綿の羽織、小倉の袴
 と、相場が、極つて、居たものぢや、有志家を、尋ねて、一泊すれば、亦た、先きの有志家へ、添書を、貰ひ
 亦た、あるとき、金を、借る事もあるが、其れとても、借るで、ある、貰ふのぢや、大勢、相會すれば、
 大名も、請求して、兵糧と、借る事もある、總て、あの時と、今日が、同様な、思ふは、心得違とい
 ふもの、今の、時節、何事も、金づくの話で、金がなければ、人が、第一、相手に、せぬ、銀行と、頭取とい

へハ馬鹿でも紳士とかちんとか言はやし華族は多く利口ものもなければ金のある所から人へ敬はれる西洋諸國でも智識あるもの財産あり財産あるものが智識があるといふ事だ何でも金銭づくで人の世話を受けぬやうなやつてから國家の爲めでも世の爲でも盡力するがよい小遣錢よまごくしながら天下を憂ふるも片腹いたいのぢやろして憂國々と言ふが今の書生の愛國の鼻の先と口の先で唱ふる許り眞心熱心して國家の爲にするものに至りて少ない様よ見受らる此の邊の所よりよく考へて人へ笑ひれぬ様よして呉れさつせい兎角貧乏書生の民權の實加のないものぢやと昔しどつた梓づかのまだ何所やらに力の残つた強異見よ近道も返す辭もわと退り手持無沙汰よ見へたりける

第十一回

二生相會 求三電線

年の頃ハ二十四五位系織の午後六時許りよなつた襟垢のたつぶり付たペンペラ拾下着の唐棧の綿入よ耳のヒケた茶博多の帯をぐるぐると巻き羽織の染返しの紺屋の手よ度々掛つた黒のビリくしさらあやつ帯へ巻付た平打の黒真田に時計と見せた苦しがり黒の山

高の少し赤色を帯びた帽子ハ三年跡よ友人の古物を引受た儘なり後ろの減た白あめりの駒下駄懐ろ手をして京橋の方からぶらぐとやつて来る横町より出た一人の書生の紺飛白の單物よ裏よ附た綿入羽織同く飛白の袴を着て白さ一巾の天竺木綿を帯どなし握り余る程の捻くれた杖を重さうみつさながら去年より刈りこまぬ髪の毛の目に掛つて夏蠅やつを搔き上げながらイヤ 刎田君 南品以來實よ御不沙汰近況如何近おる進撃ハ中止かチ「相替らせサ然し軍備よ乏しいからツイ怠りがちサ時に其邊で ナヨビリ傾ていものだの君定めて用度の儀ハ萬々承知だろウ」どころが萬々といひかねヘッの字位ハ「ソレで充分然らる引返して花月と出掛やうか其も些と大業のナ牛屋雜談あぐら鍋も紳士よ似合ねいと言れるだろウト言て松田の喧嘩亦た厭ふべしサ北川で一抔やりやせう然し君も多少の御畜財ハ有るだろウナニサ 大隈公程よヤアいのねへが矢張りツ一位の處サ大丈夫々と相談忽ち一決北川の二階東隅の一室よ綱を着子對酌のヒツク話し「トキヨハ互よ斯モニ一の御縁の薄いと言ふも不思議さことだが何の一月少くも三十圓やろこらの金よ有附く工風の有めへの僕ハ三ヶ月分の下宿ハ拂のせ其上七とこ借りも大概やり盡して最

早白計つきた譯サ外は謀もないやうだが君妙策あしか「百計つきた所へ一策持こめ
 百一計といふ譯だが其れ余り多過ぎる寧ろ二十六計減じて逃た方がよからう兩人
 「アハハハハ」違ひねへ君子は戯言なしヲツト取消くだが何分名策もないが新聞記者と
 ちつていどうだ「ソリヤア成りてい山くだが僕らの論文が書けねへから困る其でも
 新報位の出来やうやめて出来ねへ事も有るめへが第一新聞社で入れてくれめへッレいの
 困るの然し今の新聞記者あんどは情ねへものサ漢文丁度又書るの五本の指を屈する程
 のあからう君も書ねへから同じ事だるれも然うだが其れ近來の著述を見るがい、苦駄
 らねへ者ばかりだ共くせ強氣又賣るとい不思議サ閻魔大王判決録だの三政黨穴探の内幕
 話ヤレ新聞雑誌評判記の二十三年未來記あぞといろくの書があるがイヤモウ一ツとし
 て根のある著述のさい所が斯んなのが賣れるのだから世の中譯のらぬものさ「僕もろ
 んな著述をやらあしていものだナニ此れ式の著述をら一ヶ月又十や十五の出来やう一ツ
 三十圓づゝとて三四百圓のどれやせう「成る程ツイツ味い商法だイヤまでく僕らの
 矢張書まいテ「ろんなら商法いどうだ「是も資本が入る譯だから矢ツ張りだめだシテ見

るとお互いあんざアよくく不幸な人間に生れ付たと言ふもの思へバ「親が怨めい
 「親より母が怨みだナニ」親が製造したのだ母の腹を貸す迄の事サ「それでも男ばかりで
 の出来ねへ女の受太刀をするのらサヒヤくヒヤくで思出したナントお互に演説會を
 やらかし聴衆一人前十錢づゝ取揚るとすれば五百人で五十圓の右の内席料が十五圓諸
 雜費五圓と一ても三十圓の儲かる此ほど味い商法の恐らくあるめへ其三拾圓を互で十
 五圓づゝ分る月三回開場とそれバ四十五圓だ其内七圓が下宿料隔日は商品へゆくとすれ
 ば二圓づゝと三十圓其れでも八圓残るナント耐へられぬ話だソナラいつ初めるサヨ
 ヲ此次の日曜イヤまでく君の演説をした事があるか未だシナイく「イヤハヤ僕も演
 説の一向不勝手千萬だから此相談も小田原とありよけりだどう考へても官員が樂サ腕す
 くでやる仕事と藝でやる錢儲ケの逆もお互い出来ねいから一番大鯰公を生捕りの頂から
 奏任御用掛と出る工夫をそののが専一ナント一工夫付やうじやねへか「味しく此の狂
 言の少し骨が折れる一件だけれと味しいつた日よア二人とも黒塗車で高帽子紺の半天
 股引といふ車夫を抱へ込んで下宿屋の亭主あぞと眼下見くだし常々僕を輕蔑した恨を

晴すの此時はありナント早速やらかさう「此方で許りやらす積りでも先で採用しぬい
 日よやア出来ぬへ相談だろ「底だからすッぱり狂言を書くサ「此の狂言は一朝一夕よ
 の行はれぬへ先ツ三四ヶ月掛ると思ひ玉へ其かはり必きッつと受合保証證券印紙其地退
 けといふ程大丈夫サ「越中ふんどしと言ふ洒落では有るめへ「大丈夫」底で此の狂言
 をすッぱり當てお互々奏任ふなるよは三幕かく可し先づ其道具は内々政府の探偵をし
 て居る人物が或る参議の間諜とあつて民間の事を探る人物が任用だ何れでも壹人あれバ
 よい次小金が五十圓程入用サ此は又た拵へる策がわろう次大新聞社の記者が壹人入用
 次は奔走をする書生が三人入用サ是れだけの道具が全備とれば准奏任となる計略の受合
 く「一めたく其狂言の筋を聞たいものだ話さうともく「だが前祝は猫を一疋生捕る
 といふ工合よいきていものサ「賛成」く「ところで狂言の本讀よのりやせう「然し余り
 大きき聲で饒舌る可らぞ「其の僕の方すもゆりまど准奏任御用掛拜命の種蒔と言バ「ヲ
 イ」猫が來た」く「ソッから狂言の脚色の式篇よ説やせう

第十三回 放蕩結果招零落

遂受三同郷人士惠

先生伺ひますが范雎と蔡澤でいどちらが豪傑で五坐ゆり升十左様范雎の初め魏の昭王の
 處へいつて遊説一たが其説行はれ却て魏齊よみくまれ大難儀をして秦に逃入り秦王
 を説て相とあつた男だが蔡澤の跡より出掛て昭王を説き落し其跡役よあつたのだがから
 辨口や才氣の蔡の方が上手であるふ史記の列傳を見れば何れが豪傑だか直おむかる私
 常に史記を讀みまふ和漢の書をも讀まをるが昔の豪傑で天下に名をわけ人物の皆
 か天下を奔走致す様で五坐りまるとる「サヨウ外史を讀たで有うが北條早雲といふ人の駿
 河へふらりと出て來て關八州を取つ男だ支那の古史を讀ても大業をなすもの皆な天
 下を家の如くして奔走する第一維新前の英雄を見ても知れた事だ後々實は先生の仰の如
 し苛も天下よ志を得んとするもの區々邊陲の地に在りての大事成る可らぞ小生も
 大よあさんと致し候間一ト先東京へ出て天下の論者よ交り將よあそ所あふんど欲すト
 グツト大きく考へ込み是より旅費の用意をなし遙々國許よ立出て大業をなされば決し
 て故郷へ歸らず諸君も随分御壯健よ御消光可被成候と立派よ言放ち意氣揚々として國

許を立てて道中も恙なく先づ東京に着しけり差當りの足掛りも知れざれば兼て噂も聞か
 る馬喧町の旅人宿ありとの事故人力車にて乗込旅宿の二階四疊半の一間へ押こまれ獨
 りつくねんと扣へたるが兎も角も友人を尋ねて見んと獨りふらりと立出て其所此處と歩
 き廻れば目も見るもの耳も聞くもの一として珍らしからぬなり方角も知らず歩き廻
 りて人力車の代り眼の玉の振る程べられどんちものかと試みた牛肉屋の田舎相場より格
 外又高し一日二十五錢位と心得たる旅宿代は彼是五十錢許り友人と一寸登樓した割前も
 氣前と見せて自分で出して置くうち早や囊中僅な餘す十錢札數へて見れば四五枚又過ぎ
 ず是でいあらぬト俄に方法と考て見ても何の扱田舎から出たボンヤリ時勢も通じたで
 もなし學問のあるでもあしウカ／＼する中湯錢も困る様もありて着替の裕と賣拂ひ此
 次ハ小倉の袴賣り賣て喰ひ喰て賣り喰ふものハ限りある可らき賣る品の素より限
 りのゐる事にて愈々極點に達した自分漸く己の不了簡をさとり友人と逢ふて泣き言だ
 らく頼む様「トキニ此程もお話申た通り最早畜へどもなく質も進退極まり居候が巡
 査なり雇かり御周旋下さる譯もハ參る間敷甚だ自分勝手の申分ながら旅宿代も困る

仕合せ何とぞ御賢察の程願ひ奉る「イヤ僕も心掛ぬで御坐りませぬが御承知の如く官
 途と望む人の夥し事にて彼所にて書記や筆生と雇たしと公告されれば即日百人も二百人も
 押かけて參る様な景況其くせ筆も算も達者な人物が僅か四圓か五圓の給料で争つて居
 る有様でイヤモウ一寸田舎から出て来て直と月給を取る事ハ用意な譯でハありませぬ日
 外の御書面よてハ何か天下又大業でもあさるハ思召で御出京の事にも承知致しましたが
 其目的ハ立ませぬ「へエ」只今とありまてハどうも能き考も出ませぬ東京へ參つ
 て見れば國ハ居りました時の了簡と違ひましてハイ大さハ即口極まりまして五坐りま
 する「左すれば君と親御の傍で錢の出ぬ飯を喰て居らるハ時ハ一身の餬口とどの何
 でもない様と思つて居られたで有ふが吾が腕で飯を喰ハハ中々袖手して大さ口を叩く
 様ハはゆかぬ者で有る國許でハ親のお蔭で少々融通も聞き一寸した事でも親の顔があ
 れハ人も用ゆる様な者なれと見ず知らずの東京ハ向所を見ても他人だから楊枝一本でも
 只呉る人ハなし水一杯飲よも錢を出さねばならぬ其上議論の達者な人や學問文章の上手
 者人も多く君とが鳥なき里の蝙蝠で已れ一人天下の豪傑のつもりで居ても東京ハ天

下の豪傑が升で量る程ゆつて君位の人物の捧を以て市中を巡つて居らるゝから氣を付けて見玉へ一休田舎の者の東京へ出さへすむバ怒ら五十圓も六十圓も取る官員もあられる様よ心得大音を吐て出て来る様子も亦た余り鹿忽千萬な事其の様に容易ゆくからバ誰も苦勞とそるものもなく勉強して居る人もない筈あれ世の中いさう味くハ參らぬもの少し讀書でもなれた人の大概此位の道理の分るであらう又所謂古人の書を信じ過た誤り古への豪傑が都會へ出て赤子よして大業を成したとか天下を周遊して大功を立たとか言ふ事跡を讀み己れ力とも量らず夢暗と氣許り高くあつて出掛て来るソコで以て大おまを付とらう〜友人の周旋で巡查をどよ化するで有る寔よ以て歎かましい譯サト頭からやり付られ胸にギツクリ「重々御尤もなる説今更面目次第もさき仕合せ去りどて此儘國許へ立歸るも尙以て面目さき義なれば何卒いかある所へあり御周旋を下さる様「イヤ周旋の事の左まで骨の折れる事でもあければ充分盡力も致しませうが能か將來の事を考へて見らるゝがよい今何事もせで國へ歸つてハ外聞がわるいと思はるゝで有ふが大業を爲と積りで遙々上京した者が月給六圓の巡查も成つてハ尙更外聞がわるくハ有るまいか巡查

や雇と天下の豪傑が勤む可き職掌でハあるまいと思はれます「へエ、へエ、でハあり並々のものでも志のあるものハ東京まで巡查を勤めよハ來ハせまじ今歸國して外聞のわるいと言ふハつまらぬ片意地と云ものよ何の益もならぬ其れよりの一日も早く歸國し親様も安心をさせ何事あり相應の業をせよめ地方ハ任つて勉強せられぬなら第一親兄弟の喜びニツにハ土地の爲も幾分かなるであふと思はるつまらぬ了簡を出して飛出した所が矢張り今度の様な一件となる以來ハ氣を附るがよからう扱て歸國も付ても旅費の用意がなくハ叶ハぬが是ハ少々心なたりが有れば早速拵らへて進ませせう「何から何迄御懇切ある御注意難有ぞんじまぞ何分よろしく御取計を願ひたてまつる「御承知の上ハ一日も早くお歸りよなるがよからん旅費と申すハ外でもあいが一昨日同郷人三四名集會致しハ席よて君のお出の事と申出した所がいづれも其ハ不了簡の事でも有る當節柄月給さどが容易も取れる者でハない其を的よして遊で居る中ハ借金でも拵へて難儀をするでほろろ一日も早く歸郷する様よ忠告するがよろしい若し旅費でも不足あらバお互に補助してやろふと相談も出來て居たれば多分の事の六つかしいが十圓位の才覺ハ明

日も致してあげよう「左様なら御意見は随分歸國仕りませれば旅費の義よろしく御手配下さるやう「委細承知致しました左様なら明日お出なさるがよい」「ハイお暇仕りますると暇乞もソコ〜よ表へ飛出し天を仰で大息つき嗚呼未だ時機が到らぬわい

第十三回

民権主張唯招貧
紳士附若受富貴

効小節者不能行大威惡小耻者不能立業名ナアル程魯仲連味く言つたいかも此の通り小々位人悪く云はれても金さへなれば結構専威張る許り威張たどて貧乏で何んにもならぬ、獨りで合點し何やら思案の所へ表戸がらりと引明け入来るの同じ仲間の胤魔尾摺藏羽織袴立派の出立イヤ「暫くお目も掛らなんだ僕もズツ、位地を替へて眞面目なりの隠居主義サ「承はれば准奏任用掛といふ格付なるふを賀す可しく「隠居どころか君の才識では當夏ハ必ず權少書記官と来て來春ハ差向少書記官事およれば一足飛びは當年少書記官とあつて來春權大と来るかも知れずサお浦山吹といふ一件で多坐りやす「イヤ其様又祝されても閉口しやすがどうも氣樂でいよ

朝の九時頃ふら〜と出掛け一ツカニツの會議もの調印してサ底で辨當を喰て新聞を讀む許りだから何の事もない遊びおゆるなりのサ月給八十圓だから新柳兩橋の花も月五六たびの折るを得る譯で實は官途の味をしめ〜からの耐へられた者でいさい此を以て見れば民間も居て民權だの之つたのと騒ぎ廻り碌々酒も飲めずに轉げ廻るやつらは憫然なものサ閑玉へ昨夜ハ長官の處で内々の會議があつて其から新橋へ押出しどう〜今朝十時迄グッスリ寐込主義サ今日も同寮と舟行の約があるが何れ歸きば向ふ越しの北里へ進撃だろ〜其れ〜今日ハ人力車を一挺買った所がまた車夫の適當さやつ〜見當らないのら辻車で押出さうと思ふ所だが車も自分で置くさいでハ不便利極まる譯サチ〜此ごろ生初めた短い髭を引ツ張りながら夢性は饒舌れば「實以て浦山しい其れお付ても僕も早く引上げて賞はあけりやア大困る譯だが帝政黨とあつてから已〜百日の余なるがまだ纏つた金の賞つた事となし何時准奏任といふ奉書を頂戴するのハ氣が氣でいさい君の如く目的通りい〜い様な計略ハあるめ〜か「ソリヤ大有りサ君も知つて通明治日報の太田や大東日報の原などを見るがい〜何れも僕同様帝政黨ハ盡力した忠義の結果

即ち帝政黨の帝政黨なる有難いところ此の黨へ這入るからは此れ位の賜ものがあつてはつまらぬ一件だから君なども早晩御沙汰が有りやせう然し互なんども今ころ黒塗車で威儀堂々イヤ互あんどどい解せあいな僕はまだ例の青生「アイサ先づサ君も今直さ支装車上の官人とあるお違ひあしだから互の二字を下したのだが以前を考へれば馬鹿くしく耐られぬ事があるヲ互は必死に民權論を唱へて政府と轉覆しろの改革をせねばならぬと主張したころ一時政府から睨み付られぬが此れが本の山の手と云ふものにて此の民權論が即ち今日に至るの伏案と言ひので軍略上でも文章上でも緊要を所よ底で帝政黨からソロ／＼手が廻つて僕を帝政黨へ引込む算段といふ所へわざとツリ乗り込み其より勤王の尊王のと頻り主張しやそ其中要路の貴顯を取入るのが最も大切を手段だが此の手段に少々秘傳がありサ此の秘傳を傳授すると容易の事よあらまツ他日のお話と致さうか一体君の手品が下手のやうに見ゆる氣を附玉へ第一時々帝政黨擔任の役方へお見舞申す可しサ其時の必改進黨や自由黨の模様をお聞よあるとここで此方からの随分法螺を交へ他黨の努力さかんな事を申上げ又自分の最も撲滅を盡力とする様を

口振りが緊要であるお役方の第一滲心配もあると帝政黨の盛大にある事ではさく却て他黨のさかんなる事を滲心配する何でも民權撲滅と言へば極く通りがよい譯だから其邊をよく呑込むがよろしい君も知つて居るだらうが帝政黨中の人物の大体内約がしてありやす何年此の黨の爲に盡力されば何十圓の月給になるとか何々の事務を成就すれば何の官に就くとか皆なるれ／＼の内約ありサ〇〇社の〇〇〇〇や又は〇〇〇〇〇〇〇〇などは權少書記官といふ内約があるそうな〇〇日報の〇〇〇〇や〇〇日報の〇〇〇〇なども今一年もたてば多用掛といふ順ふもく約束も望む所と同じ事で目下つらい思ひをして世間から卑屈呼ばりをされるのも後々の斯んな樂さがあるうへの話で黨中一般希望は同じ點ありサ君も是から大に盡力して一日も早く飛揚する算段が専一である自分で經驗した所を以て君も告ぐるのだから僕の言に過まりのさいテ「ハ、ア成程吾輩の左様な秘傳が有るどい一向は心付あんだ帝政黨にさへ這入るに直ぐと准奏任左さくも一二等屬位にのめくたろうと思つて安心してゐたは大に過り其ならば是から要路を立入り教諭の手段をばとこしやせふ然し君のどうしても才子だよ初め民權論を唱へて政府から睨まれし時は朝

野どもよ君よ注目一たやつをグット狂言を替へて漸進主義と變じ世人のハテナ不思議な事と云中にヒヨいと青雲に乗じて准奏任とは實に其舉動非凡と言ふ可一サ君の天下の才子恐る可一ハ、ハ、才子でも非凡でもぬへが民権論で貧乏を思ひをてゐる馬鹿ものから見れば大に懸隔ありさ君も貧乏を味い萬々多合點のたのナンぼ切齒扼腕して天下とひっくり返す様を論を吐たとして味い酒一盃飲む事の出来ぬ様での情あいの極點と云ふ譯たろう殊に二十三年に至つたてお互おの貧生での國會議員なられる的のな一詰るところ人の提燈を以てツイ一騒ぎ立る迄の仕事で自分の身にどつての寸分の益ありサ然るを愛國の民権だのト恰で熱に浮れた病人の様は狂ひ廻り悪くまご一とを色バ刑法の罪人饒舌そこねれば政談を禁トられるなんぞといふ氣の利ぬ振舞ををるは才子の取らざる所當世よ不似合の話ナンと早く悟つて見れば大に已往の非を知りやと君の如きも僕と同感同情だらうら打明て話とがどう一ても帝政主義でなくての錢よならぬくら不可思議サ世間の誹りあどは空吹く風ほとよも思はず飽まで民権撲滅よ盡力一玉へハテ先刻も言た通りの工合てやらかせバ大丈夫だよヲット忘れた一今日ハ三時の集會是から例の

肉蒲團奇天烈の愉快がありやす「ハテ浦山しい」どころか余り羨やむ可からと聞玉へ此間同僚と舟行の歸りがけ廊へ進撃一た所が折しも局長が六軒に居て一妓を擁一ての秘密談判ハテ赤ト紙門の隙間より覗て見れば是のいかに僕が最愛の妓よ「コイツ面白」ナコ面白いものかするト僕大に憤怒一たが何と言ふも先が局長と來て居るから奪ひ返す譯にもゆかお見るところで樂まれる其苦一さると局長が僕輩の隣席よあるを知つてサツと紙門と押開きサア一合併でやらかさうとの照會ヨ無利一合併の大一坐で初めると例の愛妓を傍へ引付僕の見の前で洒浴ちらされる其苦一さは是も奉公の一と辛抱も一やうか毎度上役と遊べば上玉許りせしめられく僕はいつも下等物を頂戴するイヤモウ此の一點よ至れば實よ情ない話さ「世の中の事と一ツ叶へバ亦一ツ君の了簡での不満足な所も有ふが其式の事と辛抱をるサ僕の身よ成て考て見れば女風情の事なぞの意とするよ足らど何でもい一から早くモニーよ有附たひものだ「ソレも君の勉強よよる譯サそんならお暇しやう「いづれ公同會「逢やせう木の頭ナヨン一

第十四回 辨士乗三衆人喝采

是はけしからぬ只今の演説中いつれの點が國安を妨害しまた其の妨害の點をも明示せ
 せ只々中止解散を命ぜるとは甚だ以て了解の出来ぬ話では五坐らぬか其理由を承はらぬ
 内は解散はいたしますまいと張腕を以て威張り立れば聴衆も一同又聲をあげ「負るな々
 尤だぞく」解散はせぬぞく「辨士」つかりろ「負ると利ねいぞイヨ民権家の親玉
 アー」東洋のガンメッターつかり頼みませく「断し立れば辨士いよく威張りたてイ
 ヤア何の點が國安を害しまたか其の説明と承はらぬ中は決して解散は仕はらぬ 聴衆
 「さうだく其所の事とシッカリ論ず可いだるらいつく」賛美られませく「勢ひを得て
 何故又國安又妨害がありませるかサア其主意を伺ひたしト警察官を相手と「逆論」持込ハ
 さすの警察官も其不法又驚きいよく「以て許さず」國安妨害の點と此の所にて明示す可
 き限りよわらば集會條例第六條は公衆の安寧又妨害ありと認むるとき及び集會又臨むを
 得ざるものと退去を命じて之に従はざることは全會を解散せしむ可しとあり拙者に於て
 公衆の安寧又害ありと認めし上は速に解散せしめざる可らず若し解散せざる可ならば

汝を分署へ拘引す可し「拘引せんとならばせらるゝがよし然れども何々の語が安寧を害
 したる承はりたし抑も警察官は神か佛か上帝か吾輩が言ふ所の説果して公衆の安寧に害
 ありや否や其結果を見ずして知る可きの理なし又よしや害ありとするも其害の有無たる
 決して知れやとからば吾輩初め聴衆一同更又害なしとして其説を信ぜるも警察官獨り之
 と害ありといへば則ち害あるものとあすの理ある可らず若し警察官は一種特別の腦力を
 上帝より附與せらるる警察官の天下の害を前知するの神通を得られたらんふと其言は従ふ
 可しと雖も警察官も矢張り普通の人間おして人並の智力を有し尋常の精神を備へ居らる
 ゝよ止まらず如何ぞ人の知ざる害を知り人の見ざる害を察する事を得んや之れ其害は何
 等の言語より生じ可らざるやを聞ざれば解散せざるの所謂也 聴衆「イヨウゑらいつく」隊長收
 談家の親玉「まけるを確乎頼むぞトワイ」騒ぎ立辨士もいよく「命を奉せざる有様不
 警察官と大聲を以て静か致せと命ずれど興に乗したる向ふ不見口々お叫び立れば余儀
 なく辨士を引立んとするに何故に拙者を拘引致す理由を承わりたし其理由をも示さず警
 察官に於て拘引せんと認むる者は之を拘引し得ると云ふ修理はあるまじくやり出せば警

察官忽ち呵て曰く汝多辨を要するなかれト大は味勢を示せば辨士心中大は恐怖一けれど
も聴衆の手前威張て見せずバ外聞わしと無益のやせ我慢を出して「拙者の天賦の自由
を有するものなり法律の權と雖も制する能はざるものなり西洋各國の制度を案ずるに
「汝多辨を費すなかれト二人の警官立掛つて引立れば大は恐れ怖ひ上る許りなり聴衆も
口の先でこそ威張り散せ辨士の拘引せらるゝを見て吾れがちは解散しちりくゝに立去れ
バ辨士は心中大に後悔し解散を命せられし時直ちに命を奉ずればかゝる憂目と逢ふ
まじきと思へば無益の抵抗して苦痛を招く事よト去ばれ返つて居れと弱身をみせて勇
氣なし逆笑はれんと林意勇氣を面は現は一大步あるさつゝ分署小至れば忽ち拘留所へ
押まされ錠を下す音と胸はこたへ其の恐ろしき譬ふるみ狀なし心中十分に後悔して
ア、喝采を得んと欲して過激の語を發したる許りて此の苦しみとすると思へバ詰らぬ
話しあり聴衆が無暗と拍子してヒヤゝの聲を發する面白さに斯く言たから拍子するさ
らん此の語を發したからヒヤの聲は出すならんと前後の考へはさて置目前は警察官の居
るをも打忘を激語をあらべたは吾か誤りア、つまらぬ身は成つたなアと豆の如き涙を

ポロリ警官窓の下に在て曰く「ろれだから浮世民權は止つせイ

第十五回

嗟呼後悔先不立
獨坐室中一歎一居殘

夜明烏ガアゝゝ晨鐘ポーランゝゝ商人の聲油あげゝ番頭來つて行燈を廊下へ
ならべる此時獨りまぢゝとして床の内みありし書生疾ふ眼の覺てるを胸中頗る心
配の事あり加ふる敵妓は霞と顔を見よたツきり一向み來臨あく床の番もまわきて夜の
明るをまら兼たる許り鳥の聲を聞いてやれ嬉しやと思ふ所へ敵妓目をこすりこすりやつて
來て最うお歸んなさいますかと一聲掛られ余り有難くもない口上と思ひながら起出る所
へ屏風の外から同遊の兎山剣雄「ナイ猿田君起玉ふたか「誰だ兎山君か僕の今君の所へ
もかふと思つた所よ少し君は話がありやす「吾輩も君も少く相談ありと言ふ所へ是を同
遊の狐崎紺二郎「イヨウ早いナイ兎山君一件はどうするト云をじろりと睨み女郎の前
で金の事を云ふなト眼で知ると敵妓は已に悟て居ればツツ立て廊下ハタゝく出て行く跡
よ三人大評定「兎山君會計をどうする積りぶへ今仕切を持て來たのを見れば五圓九十

五錢だせ僕は前夜も云た通り四十錢と銅貨が少し有許りだから迎も間も合氣支なし君は
 いくら持て居玉ふか「吾輩八十錢あるが狐崎子といくらある」僕は十錢札たつた一枚と
 天保錢四枚廿三人のを合併しても一圓四十錢未滿と云ふものだが是では迎も追つかぬい
 話だしい「一休兎山氏が發言で僕等ア賛成して來たのだから兎山氏が居残つて僕等ア二
 人先へ歸り金策をしやう四圓五十錢も有バ堂り間も合だらう」君と金策のあてが有めへ
 「あるでもなし無でもなしサ君はどうだ」僕は一向も目的なしだ「ソソ不安心な金策を
 目的よして居残りが出来るものか馬鹿氣て居らア」ナマ馬鹿氣ても居めへ君が一番もて
 たろう「もてた所か鬻り龍銀を拜した計り今切よなつても未來歸なしサ」僕も同じく床
 の番を仰せ付られて眠るみはねむれず夜中まじりくして居たやつサ雖有く出來て居ら
 ア其くせ鰻飯を三ツ奮發した上は特別の茶菓子まで獻じ奉つたけれど「ヲイ戯言じ
 やアねへ鰻飯だの茶菓子なんぞを取たものだから會計が豫算より大に増加したのだせ
 怪しからぬ譯だ」ナンのどうせ足りぬへ金一圓四十錢で三人遊ぶこたア出來ぬい極
 つて居ア今に成て少々の事をグズグズ言たつて何も成るものか「全体君がよく終いのサ

天ぶら屋で飲だまゝで歸ればこんな目よ逢はしないわサ今度廓が一方口あつたト言ふ
 から見て來やう杯ト發言したからツイよ此よ至つた譯よ「僕許り悪いものか君等だつ
 て大に賛成して駈足で行ふなぞトいひながら馬道から大門迄馳たではないや而して此樓
 の前へ來たときも彼の三番目に居る赤い襟の女を是非己に買せろト言て夢中よ成て浮れ
 立たくせよ其時だつて僕は會計此事を心配しお互に幾何あるか豫め勘定してあがるよ
 ト言たらは大丈夫事よ臨で躊躇す可らず大功は細瑾を顧むなぞト言たであるよ今に成て
 發言者が悪いとの更よ解せ終い話だ「それでも刑法にの主従を分つてないか君の發言
 者だから主を以て論じ僕の賛成同意者だから従を以て論じ可一同犯どの言なうら自ら輕
 重あり「是れの怪一からぬ君の僕を以て刑法の罪人と思ふか聞捨よなし難しサア僕が
 いつれ日小法律を犯したるや君其の證據を舉玉へ返答に由ての僕も少しく所存ありと威
 丈高になつて威張り出せば「マツく靜にし玉へ君マツ靜よし玉へ其の議論の歸てから
 の事として宜だらう先づ此勘定をどうかせぬの成まいマツ刑法の事の跡よし玉へ其も然
 だが卷掛つて金策の工夫もないから當惑至極どうしたら宜らう」寧ろ幽を引て一人居殘

と極るサ「ろれもよからう」「サア僕が圃を出すせ」「チャット僕のの長い」「吾輩のも長
い」「ろんなら狐崎君居残りか」「ヲヤ」「情ない僕が居残りどハア、つまらない屈だ
致方かない君等早速番頭お談判して歸り玉へ十二時迄は屹度都合して來玉へよしか間違
ふと承知まねいせト心細さやる方なく獨りつくねんと一室に押込られ樂み盡て悲み來る
折も隣座敷お是も居残り書生と見へ戰聲にて吟きて曰く爲僅無一圓勘定、燈行
房裏作籠城、昨夜愉快總如夢、羨聽隣樓絃歌聲
滑稽日本神終

明治廿二年十一月廿五日 日印刷
同 年十一月九日 出版

版權登錄

著作兼發行者 長野縣平民 山崎 泉平
東京々橋區銀座壹丁目八番地

印刷者 東京府土族 吉田 錠次郎
東京神田區淡路町壹丁目壹番地

